

【宗祖法然上人御法語】

(第十三) 二行得失

1

往生の行 多しといえども、大いに分ちて二つとし給えり。

往生するための行は多いけれども、善導大師は大きく分けて二つとなさいました。

2

一つには専修、いわゆる念仏なり。

第一は専修、つまり念仏であります。

3

二つには雑修、いわゆる一切の諸々の行なり。

第二は雑修、つまり念仏以外のあらゆる修行であります。

4

上にいう所の定散等これなり。

前に述べた定善と散善がこれであります。

5

おうじょうらいさん  
往生礼讃に云く、「もし能く上の如く念々相續して、畢命を期とせば、

十は即ち十生じ、百は即ち百生ず」。

ぜんどうだいし おうじょうらいさん

善導大師の『往生礼讃』には、「もしもよく前に述べたように、

念仏を続けたまま命を終えることができた人は、十人いればそのまま十人が往生し、百人いればそのまま百人が往生する」とあります。

6

せんじゆ ぞうぎよう  
専修と雑行との得失なり。

せんじゆ ざっしゆ  
専修の得と雑修の失とを述べた文です。

7

得というは往生する事を得。

「得」というのは、往生することを得るということです。

8

いわ  
謂く、「念仏する者は十は即ち十人ながら往生し、百は即ち百人ながら往生す」というこれなり。

すなわち、「念仏する者は十人がそのまま十人すべて往生し、百人がそのまま百人すべて往生する」というこのことです。

失い失わというは、謂いく、往生やの益やくを失えるなり。

「失」というのは、すなわち往生りという利益やくを失うということだ。

## 10

雑ぞう行ぎの者は、百人まが中に稀まれに一二人往生しする事じを得えて、その外しは生しょうぜず。

雑ぞう修しゅうの者は百人まの中で稀まれに一人、二人往生しする事じができますが、その他の者は往生しできません。

## 11

千人まが中に稀まれに三五ま人生ままれて、その余まは生まれず。

千人まの中で稀まれに三人、五人まが往生ししますが、その他の人は往生ししません。

## 12

専せん修じゅうの者は皆ま生まるる事じを得えるは、何なんの故ゆぞ。

専せん修じゅう念ねん仏ぶつの者が皆ま往生しする事じが出来るのはなぜでしょう。

## 13

阿あ弥あ陀だ仏ぶつの本願ほんに相あ応おせるが故ゆなり。

阿あ弥あ陀だ仏ぶつの本願ほんと一いっ致ちしているからであり、

14

釈迦如来の教えにずいじゆん随順せいじゆんせるが故なり。

釈尊の教えにしたが随したがうからです。

15

ぞうごう雑業ぞうごうの者は生まること少なきは何の故ぞ。

びじゆしゆ雑修びじゆしゆの者が往生することが少ないのはなぜでしょうか。

16

弥陀の本願にたが違たがえる故なり。

阿弥陀仏の本願に反するからであり、

17

釈迦の教えにしたが随したがわざる故なり。

釈尊の教えにしたが随したがわないからです。

18

念仏して浄土を求むる者は、二尊の御心みこころに深く適かなえり。

念仏を行って極楽浄土を求める人は、釈迦・弥陀二尊の御心みこころに深く適かなっています。

19

雑ざつ修しゆをして浄土を求むる者は、二に仏ぶつの御み心こころに背けり。

雑ざつ修しゆを行つて、浄土を求め人は、二に仏ぶつの御み心こころに背いています。

20

善ぜん導どう和尚かしよう、二に行ぎようの得失を判ぜること、これのみにあらず。

善ぜん導どう和尚かしようが二に行ぎようの得と失とを判定されたのは、これに止とどまりませ  
ん。

21

観かん經ぎようの疏しよと申す文ふみの中うちに、多く得失を挙げたり。

『観かん經ぎよう疏しよ』という書物の中に、多くの得と失とを挙げておられます。

22

繁しげきが故に出ださず。

多いので引用は致しません。

23

これをもて知るべし。

ここでの説明によつてご理解ください。